愛國婦人會機關

愛國婦人

毎月十日廿五日發行

（定價）一冊金拾三錢一ヶ月分六錢一ヶ年分七拾貳錢全國無遞送料郵券代用（壹錢又は五厘切手）一割增
廣告料五號活字一行四拾錢

發行所　東京市麴町區下二番町三十七番地大日本女學會內　愛國婦人發行所
發行兼印刷人　山澤俊夫
編輯人　手島益雄

社説

○本會相談役子爵岡部長職氏の談話

本編は岡部子爵の談話の要領なり。頗る有益の文字なれば茲に掲げて社説にかふ

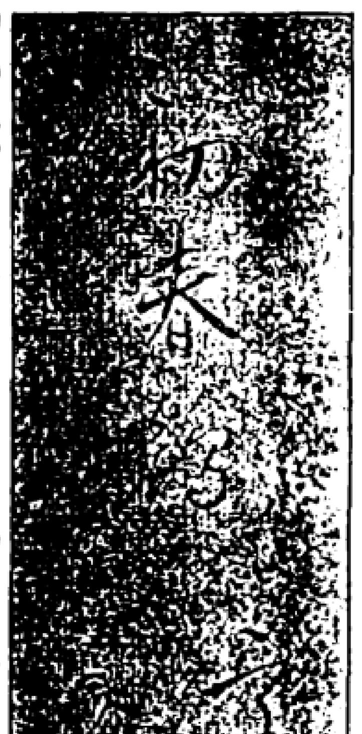
◎評議員方に望む　本會は我國の同胞姉妹を總て會員としやうと云ふ一同の希望であるが、かゝる大なる希望を以て進んで往かうとするには、互に骨を惜まず熱心に働かねばならぬ。幸にして東京に於ける評議員方は毎月二回の集會を催され、着々功を收めて居らるゝは、本會の爲至幸な譯であるが、只毎月集ッて評議するだけては評議員の職責が足れりとする譯でない。自分の考へてはいよ〳〵時局が進んで開戰となッたに付ては、評議員が各々組合を作られて、全國を勸誘に出かけられん事を希望するのである。勸誘と申しても奧村氏の様に到る處演說せよと云ふのではない。支部の所在地に向はれて、一言の挨拶だけされてもよいのである。又は只顔だけ出されても目的を達するのである。數人組合が出來ねば、一人でも二人でもよいのである。斯くすれば支部は非常に好き聲援を得るのである。且つ上流の婦人方は地方に往かるゝ事が少いので地方の民情風俗を視察する便宜がないから、自然社會の事情に遠ざかッて來るが、今日の如き機會を利用されたならば、御當人方の爲又其家庭の爲にも、大に得る所が多からうと思ふ。

◎婦人と社會　日本全國民の半分は婦人である以上は、婦人も社會上に大なる地位を得なくてはならぬ次第であるが日本婦人の大部分は未だ婦人が社會に於ける地位と責任の重大なることを自覺しないと思ふ。日本では婦人の勢力は比較的微々たるものである。これは獨り婦人だけの罪ではない、男子が婦人に對する敬意と要求が少いからである、男子は婦人を助けて諸事を務めさせねばならぬのであるが、今日の男子は婦人の方から手を引張ッてくれと云ッても成るべく婦人をして十分の働が出來ぬ様に仕向けて居る。これは男子の自分勝手主義とでも云はんか。だから、男子たるものは大に反省する所あつて、婦人の正當なる發達は常に奬勵援助せねばならん。而して婦人も一家の調和を破らざる程度に於て自ら身を提げて社會上の地歩を占める事をせねばならぬと思ふ。日本の文明が他の方面に進に比較して婦人の地位の進歩が遲々たるは甚だ歎はしき次第である。

◎婦人と矯風事業　社會の矯風事業の如きは大概婦人の力によらねばならぬ事である。婦人矯風會から毎年議會へ請願する法律の改正案即ち刑法中女子にのみ嚴酷にして、男子を問はざる現在の條項を改正して男女同等の制裁にせんとの要求がある。之は年々多數の婦人の連印を採て議會に請願されるのであるが、自分は其主旨の正理であッて人道に適ふた事と認めるから、毎年之を取次で議會に提出する役目を勤めて居る。此請願が聞入れらるゝといふ事は今日の場合むつかしいとは思ふけれども事柄はよく且つ請願者たる多數婦人の鞏固なる氣力には甚だ感心するから、毎年取次で居るが、是は一例として總て矯風事業の如きは男子よりはどうしても婦人の力によらねば根本的には行ひ難い事と思ふ。

◎家庭　近頃家庭問題か非常に盛んになッて居るが、世の人が家庭と云ふ意義を眞に玩味して善く解して居るものは尠い。家庭とは人が只雜然として共同に家に住んで居るを云ふのではない。一つの家庭には之を統一したる意思があッて、父母夫婦長幼男女各々其處を得ねばならぬ。家庭には各々自ら其特風かあらうが、自分の處では家の日常の事は多く妻に委ねてあッて、餘り干渉しない。大躰の事は夫婦共同の協議て定める様にして居る。自分共は此家庭と云ふ事に甚だ重きを置て之に付て研究もするし、實行もして居る。自分では成るべく理想的家庭を作ッて見たい積りであるが、中々意の如くには往かぬものだ。これを具躰的に示して家庭とはこんなものであると云ふ譯には往かぬが、家庭團欒の眞味は先つ自得して居る積りである。

◎子供の敎育　自分には既に成長したる子供の下に又十二を頭に八人の小兒があるが、之を敎育する事は中々むつかしい仕事である。家庭敎師として男女二人の敎師を傭うて家に寢とまりさして之に子供の敎育上の事を擔任さして居るが、成績が頗るよい。氣を付けて放ッておけと云ふ事は子供を敎育する金言であるが、自分はなるべく干渉しない事にして、子供の行爲を自由にさして居る。併し一度命令を下した事は嚴格に服從せしむる事にして居る。これは上長の敎へに服從するといふ耳氣風を養ふためにも必要と思ふ。次に僞言を陳べぬ事には深く注意して居る。衣服は質素にして女兒と雖も筒袖にして、且つ運動は十分にさして居るから、小兒等が皆よく歩きて、一里や二里の途は平氣である。現に學習院へ通ふ子供は、往きがけは汽車て往くが歸りは歩かす事にして居る。又時々は家庭敎師と伴ひて遠足さす事がある。閑な折には自分夫婦も往ッて見る。又閑さへあれば子供を相手にして子供らしく遊んでやる。これは其間に自然と自分の氣風を傳へる事も出來、子供の觀察も出來る手段ともなり夫のみならず無邪氣なる兒童の遊戲に中間入りすることは言ふに言はれぬ快樂を感ずるのである。



侯爵世嗣夫人　徳川久子筆

◎下婢問題　我國に於ては下婢は殆んど族家の一員と認められて居るから之を傭入るゝについても、之を使用するに付いても、深き注意を要する事である。自分等の如き舊藩の關係よりして舊藩のものより傭入るゝ時は主從の關係が深くして、十分に責任を以て盡すものがあるが、段々舊藩の者を傭入るゝ便利も減ずるから、自然市中の口入屋等より傭入るゝ様なとになる。之は頗る注意を要する事である。元來英國邊りでは下婢にも二つの階級があつて、上流社會に使はれる下婢と、さうでない下婢とがある。そして下婢の履歴と云ふものは甚だ正しいものであッて、何家には何年勤續して一も過失がないと云ふ精勤證書を傭主より得て居る。故に其履歴は其社會ではちやんと知れて渡つて居ッて惡いものは下女の資格を失なふ工合になッて居るから、傭ふ方に於ても甚だ安心であるし、傭はれる方に於ても責任を重んじて働くと云ふ事になるが、日本の如く新に傭ふ上に於て何處のものやら何處に勤めて居ッたものやら素性が知れぬものを召かゝへて、それに家の事を扱かはせるのは甚だ危險なといふよりも寧ろ大膽な處置で特に感化され易い幼年の女子の品性を誤まらるゝものが多いのは甚だ歎ずべき次第である。之は今の内に何とかよき方法を作らねばならぬ事と思ふ。自分の内では元と何れの邸に勤めて居ッたと云ふ事が知れた時には必ず其家について其者の勤中の行をよく聞糺した上て傭ふ様にして居るがこれてもまだ不完全な仕方であると思ふ。

◎家庭と音樂　家庭をして和樂にして暖きこと春の如くせしむるには、音樂が最も必要である。而して老幼を一團として樂ましむるには、日本在來の音樂よりは西洋音樂の方がよろしい。つまり音樂は家庭を統一する處の最大要具て、品のよい音樂は總ての遊びの内て最も高尚のものである。日本には家庭的の音樂の趣味が欠けて居るから、兎角家庭は殺風景過ぎる傾向がある。即ち溫度が足らぬ風呂の様な心地がする。されば樂器は家庭の溫度を保つため必要の薪炭であると云うてもよいほどである。自分は此後益々此音樂的趣味を我家庭に加へる事をつとめる積りである。要するに、自分は社會に於ける婦人の位置の重要を感ずる程度は他に讓らない積りてある。

電話番町壹千三百三十番

◎本號附錄には評議員總會の寫眞附錄を添ふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

論説

○風俗改良論

内閣統計審査官　呉文聰

何れの國民と雖も物を喰はざるは無く、子を生まざるはなし。國土の性質に從ひ歐米の人は麵包を常食とし、東洋の人は米を常食とす是れ風土に伴ふ慣習なり。其他日常の事、處變れば品變り、國々地方地方に依りて異なる風俗あるは一々數ふるに遑あらざるべし。例へば歐洲にては喪服に黑色を用ゐ、東洋にては白色を用ゐ、歐洲にては老婦服裝に華美の色彩を用ゐ、東洋にては小女獨り華美の色彩を用ゐるが如く、極めて反對なるもの少なからず。然れども是等は事に害なきことなれば、利害の影響なしといへども、歐洲に接吻の習俗あり、本邦に酒杯獻酬の禮式あるが如きは、衞生上忽ち大害を來すものなりとす。然れども歐洲人の間に接吻を禁止し、本邦人の間に獻杯の禮を廢せしめんとするも、是れ容易の業にあらず。然らば之を放任せんか結核性病素の如き永く杜塞の道なかるべし。然るに風俗習慣は所謂風俗習慣となりしものなれば、如何なる惡風陋俗も其社會に居りては、明かに感知し難きなり。支那婦人の纏足、歐洲婦人のコルセット、本邦婦人の廣帶の如き、又本邦人の日常危坐するが如き、惡風陋俗なるに相違なきも、其國々の間にては何人も之を怪しむものなし。既に怪むものなし、又誰れか其風を革むるを勉めんや。總て惡しき風俗習慣ありて而かも人の掛念とならざるは、其耳目に馴れて怪まれざるが爲めなり。今日は肉を喰ひ葡萄酒を飮むとも、何人も之を怪まざれど、三四十年前までは葡萄酒を飮むを見れば生き血を啜るならんと疑ひ、肉を喰へば身を穢すものとし、神社は勿論神棚を設けたる吾人銘々の家には入るべからざるものなりと思ひしなり。其頃頭髮を刈りて、髮を結ばざる人ありたらんには、願人なりと思ひ、賤み嫌ひしなるべし。(願人坊頭と云ふは髮を五分刈とし月毎に就て合力を願ひし乞食なり。)當時人の妻にして歯を染め、眉を剃らざる者あらば、不貞の妻なりと思ひしなるべし。然るに今は如何んビール葡萄酒の類を飮まずと云ひ、牛肉羊肉の類を嗜まずと云ふ者あらば、あな笑止不開化の人よと嘲けり、結髮を頂く者あらば、珍らしき田舍人よと指笑し、婦人にして歯を染め、眉を剃りし者あらば、是又不開化固陋の徒として嘲らるゝなるべし。是れ知らず知らずの間、風俗の一變したる徴證にして斯くの如く今昔其感を異にするは、日常耳目に觸るゝと、觸れざるとに由るなり。故に平日見慣れ聞慣れたる事は、惡も惡と見えず善も善と感ぜざるなり。善の善と見えざるは事に害なしといへども、惡の惡と心付ざるは抑も如何に。飮酒家は日日飮酒して身を害し妻子を苦しめ、其惡たるを心付かず、下戶は茶を飮み菓子を喰ひ消化器を損し胃痛を發し、而かも其害を知らず衣服に奢り遊樂に耽る者も、其弊の漸く來るを知らざるなり。是れ一人一個の事にあらず、社會を擧げて斯る弊風に陷り、而かも之を悟らず、終には家國をも喪すに至るべし。例令へば道義の感念漸く薄く總て成功とは不義を爲しても富有となり、肉體の快樂を縱まゝにすれば可なりとなし、公德私德幷に頽廢して顧みざるが如き、乃至は各種の選擧に金錢を先きとして人の品位を顧みず、選擧人は唯だ貪て厭くことを知らざるが如きとも、地方の風俗となれば何人も其惡習慣を感知せざるに至るべし、豈寒心すべきにあらずや。

今此に各國に行はるゝ奇異の習慣を擧げて我が說の單に理論にあらざるとを立證すべし。米國のユタ、ソルト、レーキ、シチーにサラア、エリオットと云ふ女醫あり、曾てモルモン宗の一婦人を治療して其病を治せしに、其婦人謝意を表するため女醫の許に行き、其治療を謝し、終に謝禮の微志として、其夫と婚姻せんとを乞ひしかば、女醫大に怒り之を近隣の妻女に語りしに、其女も亦モルモン宗の婦人なりしかば、其話を聞き終りて云ひけるやう、其は甚だ失禮なる申狀なり、妾の夫は彼の女の夫より身分ある者なれば、寧之と婚せられては如何と云ひしとぞ。是れモルモン宗の人々の間にては其風俗として少しも奇戲とは思はず平常の事と思へるなり。又阿弗利加のニグロ人の中にては、妻を多く有すれば有するほど有力者として尊重せらる。歐洲の宣敎師多年一夫一婦の敎を說けども、更に其甲斐なければ先づ男子を措きて女子の同意を求むるこそ得策ならんと段々と一夫一婦の事を說き勸めたるに、婦人も亦矢張一夫多婦を好めるを知れり。其故を尋ぬるに、此社會にて一人や二人の妻を有する者は、最も意氣地なき下等の男子にして、聊かにても働きある男子なれば皆數名乃至數十名の妻を有す。是を以て事理を解し其社會に多少勢力ある人の妻となるには、無論多くの婦人と共同ならざるを得ず、一夫一婦にて暮す者の如きは此社會にて最も陋劣なる者なりとぞ。又先頃我が東京に滯在せられし米國婦人ラインハート氏の話に一婦多夫の風俗行はるゝ西藏にて、曾て親しき婦人に澤山の夫を持つよりも一男子を夫と定め持つ方よからずやと問試みしに、彼女は矢張多夫を欲すと答へ、而して其理由は若し一人の夫のみを有せば其夫死すれば寡婦となるが故に好まざる所なりと云へりしとか。一夫多婦一妻多夫吾々より之を見れば極めて奇異の習慣なれど、斯る風俗の行はるゝ社會にては是又少しも怪むに足らず、却て一夫一婦を以て物足らぬよとならんと思ふなるべし。又普魯士内なる撒遜のストローベックと云へる小村にては、往時より將棋流行し、其地の小學校にては、學課の外に將棋を敎へ將棋の試驗もありて、男女の生徒中優等成績を得たる者三名づゝは之れが爲に賞與をも得る次第にて、家族は之を以て榮譽と爲すとぞ。是れ甚だ奇なが如しといへども、現に昨年中東京市下谷の或る貧民學校にては、學校に浴場を設け、入浴せしめば金錢を費さずして淸潔となることなれば、父兄もさぞかし悅ぶならんとて、此相談ありしに、父兄は大反對にて、其理由は學校にて髮を刈たり湯に入れたりして奇麗にされるときは、朝夕お貰ひに出られぬとになると云ふに在りと。明治二十三年に府下の貧民を調べし折の話に、深川大島町の邊は本來漁場なるが故が、昔時より妙に男氣ありて我慢を張る習慣あり、一日三回の食事を二回となし、且つ挽割粥を啜るほどの困窮に至りても、其困窮の體を表に顯はさず活計上の事に付他人に泣事を云ふを以て非常に恥辱と思ひ、獨り內心にて苦しみて尙此町には貧民なしと云ひしと云ひ、又本所區の某町某長屋の某なる婦人は、己れ家賃の日掛けを爲し得ざるほど窮するにはあらざれども、同長屋の人は家賃の日掛皆滯ふるが故に附合上掛錢を爲さずと云ひしとなり。其他地方に依り早婚流行し、或は離緣多く、又は賭博子殺など忌々しきものゝ數々行はるゝ處少なからず。斯くの如く流俗は恐ろしきものなるに、花牌など弄ぶ風俗今は上中等の家庭にも少なからずと聞く。今や漸く花牌を弄ばぬ者を指して不開化の愚物と嘲笑し、弄花を以て人々交際の要件と爲すに至りしとか、風俗の壞廢も極まれりと云ふべきにあらずや。三百年前に日本に來りし外國人の日本の評判記なりとて德富蘇峰氏の日本政敎史より譯出せし所に據れば、日本人は其一般の氣質として名譽を重んじ、外より賤め下げすまるゝを嫌惡す。今日つ事業に於ても、名譽を得ると、出群の成功とを好むが故に、一途に自分の職務を勵み如何なる小事といへども不當の所爲を爲さず。日本人は身分に應じて責任の義務を怠らざるが故に、不正の言を發し損害を爲すと少し。日本人は禮儀に厚く、諸人互に相尊敬す。日本人は貪慾を嫌惡し一人貪慾なれば目して卑劣醜體、廉恥なきものと爲す。日本人は凡て不正を好まず故に賭博密賣の如き不義の富を欲せずと。是れ曾て日本に行はれ外人をして欣慕に耐へざらしめし所の風習なり。今日行はるゝ所のもの亦如此か、余は尙斯くの如くならんとを冀ふ。

惡習俗は右の如く、其惡習先例となりて人々の知覺を麻痺し、其醜惡を認めざるに至るに在り、故に社會の風俗を改良せんと欲せば、先つ躬ら好先例を示し、以て好惡の別を知らしむるに在り。世の事は總て無理が通れば道理引込と云へる諺の如く、無法亂暴不知恥輩が跋扈すれば、高尙謹嚴の人は却て閉塞するものなり、又高尙謹嚴の人世に行はるれば、亂暴無恥の輩閉塞すべし。例令へば其子弟の謹愼勉勵ならんとを望みつゝ、己れ先づ惡例を示さば如何、到底子弟の善行を望むべきにあらざるは明瞭のとなり。されば社會の風俗を改良せんと欲せば、先づ其意を誠にし其心を正うし、其家庭を整ふべし。語に曰く一家仁なれば一國仁に興り、一家讓なれば一國讓に興ると、聖人吾を欺かず、是れ余が統計學上研究せし結果の立證する所なり。(完)

大日本女學會々員北川すゝ子ぬしの歌の預撰をいはひて　三井五十子

雲井まできこえけるかないはかねのまつふくかせの音たかくして

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

◎静女

評議員　下田歌子

静女は、京都の白拍子なり。夙に、藝名の、世に嘖嘖たるのみならず、才色また双ぶ者なかりければ、源義經が、平家追討の功成りて、京都に登りける程より、殊寵を蒙りて、堀河の第に侍しぬ。然るに、西海の波、猶未だ穏かならぬに、端無くも、連なる枝に風騒ぎ、隔つる牆に相鬩ぐの、已むを得ざるに至りしかば、兄頼朝は、僧昌俊を、京都に登せ、其第につきて、弟義經が擧動を探らしめき、義經これを悟りて、甚く昌俊を詰りにければ、昌俊百方陳辨し、誓言を立てゝ、事漸く解くるを得たり。此時、静は、そが側に侍りけるが、窃かに、義經に告げて云へるやう、「君、能く御心し給へかし。昌俊は、他事無きさまに申しなして侍れども、罷り出づる時、左右を見廻しつゝ、殊に御厩に目を注め侍り。必ず、異志のあるにこそあれ。いかで能く御心し給へ。」と諫めたりしかど、義經は更に意となさず、「心易かれ、昌俊が、輩、何事をか爲出づべきぞ」とて、事も無げに打ち笑へり。されど、静は、いといたう心もと無く思ひて、絶えず、萬づに氣を配り居たるに、果せるかな。其黄昏に及びて、大道に塵起ること夥し。「すは事こそ」と、急ぎ侍ふ人々を召し、二人の童をして、昌俊が宿所の樣を伺はせけるに、時移りても還り來ず、更に人を走らして見しめしに、そが門の當りに、二童は、枕を並べて死せりと報じぬ。今は、瞬時もためらふべきにあらずとて、義經が居間に入りて見るに、微醉猶醒めず、脇息に凭りて假寢して在りけり。静は、物をも云はず、長押のもとなる鎧を取りて、枕上に置きぬ。義經は、鏗然たる、草摺の音を聞きて、「がば」と跳び起き、忽ちひし〳〵と、物具して、「憎き小童、いて〳〵」と云ひながら、傍へにあり合ふ、小太刀を取りて、走り出でんとしてけるを、静は押し止めて、「小敵なりとて、侮り給はゞ、御後悔もや候はん。これ然るべうもや」とて、弓矢を取りて、參らせければ、義經は、げにもと、これを右手に持ち、右手に宿直の者どもをさし招き、第の正門を八字に開かせ、昌俊が寄手を近々と引き寄せて、唯一戰に打ち散らしぬ。然れども、鎌倉殿を敵にして、此所にてさふらふべきにあらねば、戀しき都を跡に見て、吉野の山にぞ隠れける。實に定め無き人の心は、勢ひに就き、衰へたるに背くは、昔も今も同じ如、淺間しき世の習ひとは云ひながら、慈悲仁恵を衣とする、吉野の山僧すら、時の風潮に心變りし、背きて遂に義經を攻むるに至りぬ。爰に於て、義經も、武運の末ぞと思ひにければ、懇ろに静を慰め、金資許多賜ひつゝ、從者何某を從へて、都へ還らん事を勸めき。静は、もとより、死ぬるも活くるも、唯諸共にと、泣き焦れて、御供にこそと願ひけれども、義經は承け引かず、此期に及びて、猶側室を伴ひたりと云はれんこと、死後の不名譽、今生の遺憾なり。斯くても猶聴かじとならば、二世の契りも今日を限りぞ」と窘められしかば、静も今は返すべき詞も無く、涙にくれ惑ひて、下山に及びけるに、不道なる從者は、途中より金銀財寶を奪ひ、静を捨てゝ、逃れ去れり。さらでだに、來し方行く先も見えわかぬ吹雪の空、白銀の蛇蟠り、白刃の峯そば立てる、吉野の奥の岩角を傳ひて、夢路をたどり下だる程に、山の荒法師に見出でられ、捕らへられて鎌倉へ護送れぬ。頼朝直ちに命じて、斬に處せんとせられしを、夫人政子の諫めにより、命ばかりを助けられ、猶、幕下の看守のものに、鎌倉にぞ召し置かれぬる。

（未完）

童話　牝牛

駿谷小波閲
高階柳蔭郎

ある處にお蓮と云ふ寡婦がありました。兩人の娘を殘して夫に早く死なれたので、それから數年の間、女の手一つで兩人の娘を成長させるのは實に容易なことではなかつたのです。元來身代が大いしてあると云ふのではないのですから、小供を對手に仕事をしたり、牛の乳をしぼつてそれを賣つたりして、やつとその日を暮して行きました。ところが或年のことでその地方に牛疫が流行つて、お蓮のところのたつた一匹しかない大切な乳牛も、それで斃れて了ひました。さあ[illegible]の資本が無なつたやうなものですから、お蓮は落膽して明日からは何うしやうかと歎いてをりました。最も貯のお金があれば牛も買うことが出來ますが、今まではほんのその日暮し同樣にしてゐましたから中々そんな準備はありません。たゞ新規に牛を買うお金が欲しく、斃れた牛が殘惜しくつて、くよ〳〵としてをりました。

お蓮の隣家に一人のお婆さんがありましたが、年はとつても壯健で若い者も及ばぬ位よく稼ぐ老人でありました。その人がお蓮のくよ〳〵と鬱いでゐるのを見まして氣の毒に思ひ「お蓮さん、お前さんのやうに毎日さうやつて鬱いでゐたつて詮方がないちやないか。ちと元氣を出したら良いちやないか、ナニ不幸だ。いくら不幸だつて自分の氣の取り方さ、人は七轉八起と云ふから、精出して稼ぎさへすりやまた良い事が廻つて來るさ、それに神樣だつて見てゐらつしやるわ、自分のやり方一つで何うともなるさ。」

「小母さん難有う。したが何うしたら良いか、私にはとんと考が付かないんです。」

「ナニサ別に六つかしい事はありやしない、お前さんの處は親子三人だらう。だから第一にお前さんたち三人が心を合せて、今まで一日に六時間糸を操つたり仕事をしたのを、もう二時間餘分に働いて八時間するのさ、さうしたら一日に一人が五錢なり十錢なり多く稼げば、そら三人で廿錢卅錢の利益が出て來るだらう。それと第二には成るたけ儉約して毎日の入費を少なくするのさ、お前さんの家では朝からお茶を入れたり、お菓子を喰べたりするが、彼樣ことを廢して了つたら、それだけ入費が減る譯だね、それやこれやを積んでをいて一年たつて御覽、乳牛の一頭位は何でもないさ。」

と親切に異見をしてくれましたので、お蓮親子は成程と思ひまして、その日から早速お隣の小母さんに教はつたとほり、非常に勉強して稼ぎましたので、何しろ一方では多く儲け一方では儉約して入費を少なくするのですから、一年の後には大分お金が貯つて、かねての希望どほり前のよりはもつと良い乳牛を買つて、まだ何程か殘つてゐましたが、それからます〳〵稼ぎましたので、次第に安樂な身になりました。

自分で本氣になつて一生懸命に働いたなら、幸福の得られない事はない。勤儉は安樂のもとである。

家庭教育佳話　愛犬と狼

「歐米家庭教育佳話の一節」

獵笛勇しく森に響き渡れば、獵の士も獵の犬も數多ウエールス王ルエリン（一一九〇—一二四〇）の下に集ひ來りぬ。王は尚々高く笛を吹き鳴らし其愛犬ゲラートを呼んで『來れゲラート、汝は如何なれば來ることの遲きぞ、忠犬ゲラートは、そも何處にさまよへる、家に在りては小羊の如く、獵に出てゝは獅々の如き愛犬ゲラートよ』と叫びしかど、終に來らざりしかば、此日王は氣も進まず、獵場の獲物も寡なかりしかば、王は快々として歸り來れば、城門近くゲラートは尾を掉りながら出て迎へり。見れば不思議や其軀も其口もとも血まぶれなり。こは何事の起りしかと、不審の眉を顰めながら、大將内に入り給へば犬も後より入りにけり。嗚呼こはそも何等の珍事ぞや、幼兒の寢床は血痕點々、褥も紅、床も紅、腥氣鼻を衝て凄じきこと言はん方なし。王は狂へるばかり、せき込みて、聲を荒らげ、坊よ坊よと叫びつゝ、室又室を探かせども、唯見る者は紅の血潮の痕のみ。『ウヌ惡くき犬かな。汝主恩を忘れて居りつるか』といふかと思へば、秋水一閃鍔も通れど、ゲラートが横腹グザと突き刺したり。ゲラートが臨終の際に一聲高く叫びし音に眼を醒しけむ。呱々と泣き出す聲しけり。こは不思議やと聲をたよりに探がしゆけば、裁りさかれたる褥の下に幼兒は無事に臥たりけり。躰に爪の跡さへなく、少しの傷もなかりけり。さるに同じ褥の下に大きやかなる狼の寸斷にさかれて死せるあり。『嗚呼過てり過てり、幼兒の仇は狼にて其狼を喰ひ止めしは、愛犬ゲラートなりけるか』と、悔ゆれども悲しめども、唯無益なるを如何せむ。頓がて壯麗なる忠犬の碑を建てられ、道行く人の吊涙を促しつゝ、今も現に在せりとぞ。さるにても王ルエリンが其後の寢覺めの惡かることよ。幼兒が呱々の叫を聞く毎に心の耳には、ゲラートの憫れな最後の叫や徹すらむ。

狩野

評議員　中山幸子

ふりつもる雪をけたてゝものゝふの
わしをかりのゝいさましきかな

うこきなきやまとしまねをあた浪の
いかてよせくるとのなるへき

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

家政

◎家政要領

人事（つゞき）

○惡露　即ち產後の降り物は、娩產後二日間は通常の血液の如し、其後三四日は色稍薄けれども猶ほ赤色を帶び、七八日より二週間許は白き膿液狀となりて遂に全く止むものを正當とす。若し血液狀にて長く續き、且つ其量の過度なるものは、病氣なり。斯ることあるときは、往々血暈を生じ、腦貧血を起して、爲に失心することあり。俗に之を血が上ると云へど、實は血の下るに由るものなり。

○分娩の輕重と時間の長短とは、國々によりて相違あり、我國のは概して歐洲のよりも輕くして早し。我國にては初產に於て、前徵ありてより八時乃至十四時にして娩產する者もあれど、大抵は極めて輕くして、僅に一二時間にて終る。斯く娩產は概して容易なるものなれども、其催しの徵候ありし後は、早く產婆を招き、產湯の用意を爲すなど、決して油斷すべからず

○產婦の衣服は常と異りたるものを用ゐるを要せざれども、唯臥具には注意すべき要點あり、昔は產婦に蓆を敷かしむるを例とせしことありき。是れは清潔の點には稍採るべき所あるも、衞生上より云へば、近來の如く通常の蒲團の上に桐油紙を敷き、汚れたるときは、直に取り代へるを宜しとす。又昔は坐して產を爲し、產後も數日間產籠に倚りて晝夜坐してのみありしことなれど、是れも亦宜しからず、平臥するを最も良しとす。枕は高くする習慣あれども、腦貧血などの徵候あるときは、却て低くせざるべからず。

○產婦の食物に就いては、昔は食禁を嚴にせしものなれども、今は其必要なきことを認むるに至れり、殊に牛乳の如きは、最初より用ゐて妨げ無し。產室は成るべく廣く且つ明るく、通氣の十分なるを良しとす。從來產室を故らに暗くしたれども、唯日光の直射だに避くれば、光線の適度射入するに如くことなし。

○產婦の運動　は產後に於ては宜しく之を愼むべし。厠にも行くべからず。是れ啻に運動の宜しからざるのみならず、產後は腹部空虛なれば、外部の汚氣の下より侵入する虞もあるなり。されば清潔なる便器を用ゐるを可とす。

○產婦の面會　又產婦は殊に睡眠を肝要とすることなれば、訪問者に長時間應接せしめ、或は無用の談話などして之を妨げ、煩倦を感ぜしむるが如きは、甚だ不攝生のことなり、愼まざるべからず。

○產婆　は出產に臨みて內診を施すことあり。斯る時は嚴重に消毒せしむべし。產婆の手指爪等の不潔より思はざる害を受くることもあるものなり。

○產褥　產褥に在る日數は、三週間、所謂枕直しの日までを以て相當とす。されども此間必ずしも橫臥するを要せず。彼の惡露の色附ける間は勿論、褥中に在るべきものなれば、少くも一週間は就褥し、其後二週間も猶ほ成るべく褥中に起臥するを可とす、併しながら、身分に由りて止むを得ず一週間後直に勞働に就かざるを得ざる者もあるべし。又娩產の時の汚穢物は、必ず人家を離れたる所に持ち去りて、燒却若くは埋納すべきなり。

◎新年宮中御宴會賜饌調理方

○御吸物　白味噌　鯛

御吸物。白味噌つねの通りに調へ、鯛は御し身を二寸五分四方にし、其中に入れて羹上げる。

○御州濱臺　日の出蒲鉾　末廣竹の子　松竹梅双鶴　常盤燒鴈

州濱臺　日の出の蒲鉾は、常の通りに板に付けて蒸上げ、一分ほど紅肉を付けて火にかざす、此は火加減を要す。

常盤燒鴈は、鳥をよく叩き、板おしをし、擂鉢にてよく擂り、味噌醬油にて味をつけ此に玉子を鴈一羽に五箇ほど入れて擂りまぜ其を板に一寸程に付けて、蒸上げる。次に、其上に一分ほど靑色の擂身を付けて今一度蒸上げるので、其靑色はよせ菜にてする。

末廣竹の子。よく茹て四割にして、下より竪に庖丁を入れて羹上げる。

○御燒物　小串付燒鯛、猿猴て金銀水引飾

常の通りにするも、切方は太し、付燒にする。金銀水引は、鰭飾、尾飾、尾紙には紅白の糸を掛ける。

○御造身　鯛うど、防風、花山葵

造身は常の通り、うど、防風、剣花は寒牡丹改敷。

○御味煮　寄鶉うど、粒椎茸

味煮。寄鶉、よく叩き、金漉にし、擂鉢に入れてよく擂りまぜ、醬油、味淋にて味をつけ此に魚肉も少々入れ、同じ樣にしてよく雜合せ、蒸上げて切形にする、うどは篠むき。

○御溫物　火取鱧、玉子とじ、松茸栞

御溫物。玉子とじにする、火取鱧は骨切にし、一度醬油の附燒にして切形する。松茸は鑵詰のがよろし。栞はつみて用ゆ。

○御加藥飯　燒そぼろ鯛、竹の子、千玉子、椎茸

御加藥飯。燒そぼろ鯛は、御身にして皮骨共取り、醬油の附燒にして細々にして用ゐる。竹の子は細線に切り、椎茸は細々に紅生姜は線切にする。

○御浸物　菠薐草、黃菊

浸物。菠薐草、黃菊、何れも常の通り。

○御水の物　卷柿、砂糖煮金柑

水物。卷柿は、干柿を竪に開き、種子を取り、木口より卷きて、切形したるもの。砂糖煮金柑は、金柑を入れ種子を取り、よく茹てあげ、砂糖煮したるもの。

○御取肴　鹽むし切重車海老阿茶ら漬、菜付大根こん

御取肴。鹽むし切重車海老は頭を取り、魚串にさして鹽ゆでにし、其を二つ割にしたるもの。あちやら漬の菜付大根は細根大根の薄皮を剝ぎ、一日程鹽おしにし、水にて洗ひ其に砂糖、酢、唐辛子を入れてよく煮かへし、冷たる處へ大根を入れて漬置きたるもの。

○御吸物　すまし梅花鳳壽芝海老、花菜

御吸物。魚の擂身を、板へ三分ほどに附けて蒸上げ、梅形にて抜く。芝海老は、玉背、腹を去り、湯煮にして用ふ。花菜も其に同じ。

◎牡蠣貝の調理

たまごむし　牡蠣の十分細かなるを割り、さて鷄卵を割り、よくかきたて、味淋少しと食鹽にて味をつけ、大なる丼の中に、牡蠣の割りたるをいれ、其上に鷄卵のときたるをいれ、かき廻し、針生姜を上にまき、蒸籠にてむすべし。これの蒸上りたるを鉢の儘、盆にのせて持出、中皿などに分配して食すべし。

又茶碗むしの如く、小なる器にて一人毎に宛蒸たるもよし。

鹽にて味をつけず、煮出しと醬油にて味をつけたるもよし。

分量は牡蠣の身斗り一合なれば、鷄卵三つの割合にすべし。

又他の品々をあしらひに取合たるもよきものなり。

かきめし　牡蠣の細かきを割り、煮出しに醬油味淋を加へ、鹽梅して前の牡蠣をザッと煮置き、さて上等の米を洗ひ、例の如くたき、煮え付たる時、煮置たる牡蠣を汁の儘飯の中にいれ、又蓋をして暫くむし置、程見計ひ、杓子にてかき交ぜ、さめざるうちに食すべし。分量は米一升に牡蠣三合位にてよし。

◎季節料理の數々（二月中）

○野菜物　獨活、竹の子、鶯菜、田芹、はうれん草、龜井戶の細根大根、京菜など野菜料理の珍なるべし。

○お肴　鰆の走り、ブリ、目鯛、比良目杯食卓に上るべく甘鯛、味噌漬、鮟鱇の小鍋立、ほうぼうの鹽燒、烏賊と貝の柱の寄せ鍋も美味なり。海鼠の跡の鳥貝は季節物にて賞すべく其他小鳥料理、山兎、鮒の雀燒、タナゴの辛煮も妙なり。

◎家計收支の實況

鹿兒島　某　報知

一家族十四人　祖母一人父、母、叔母二人兄一人自分靑生男女四人下男一人下女二人（職業農）

一收入金八十五圓

一支出金八十圓三十一錢

內

交際費	金五圓
書籍費	金一圓九十錢
被服費	金十三圓
稅金	金十一圓五十錢
石油	金一圓二十五錢
父小遣	金五圓
叔母小遣	金一圓五十錢
母の小遣	金一圓五十錢
自分小遣	金一圓
下女給金	金二圓十錢
敎育費	金二圓三十錢
生命保險費	金六圓六十錢
副食物薪炭油	金十五圓
衞生費	金五十六錢
田畑費用	金一圓
雜費	金四圓九十錢
新聞雜誌	金一圓二十錢
靑生二人費用	金一圓五十錢
下男給料	金三圓五十錢

殘高金四圓六十九錢　貯蓄

但し米野菜等は自家にて作るものにつき計算に組入ず

◎慰問使を第二師團に差遣さる　總裁閑院宮妃殿下の御旨により、慰問使を仙臺なる第二師團に差遣さるゝ事となり、評議員子爵夫人岡部抵子、男爵夫人松平須磨子の二氏は、昨九日午前八時上野出發、仙臺に向ッて急行せられたり。

◎慰問使を第十二師團に差遣さる　總裁閑院宮妃殿下は佐世保に向ひたる慰問使の一行を更に小倉市なる第十二師團に慰問使として差遣さる。

◎慰問使の一行佐世保に向ひたる慰問使の一行は、去にし六日午前六時佐世保着、長崎縣支部幹事長荒川菊子、同幹事松本せい子、佐世保鎭守府副官海軍少佐吉田辰男、第二艦隊副官舟越少佐、井に奧村刀自、中村事務員等、停車場に出迎ひ、鎭守府に案內せられ、それより舟越少佐の案內にて三笠艦に向ひ、聯合艦隊司令長官東郷中將、同艦長中尾海軍大佐、參謀[illegible]等列席の上、御慰問の御旨を述べ、且又會長代理として長崎縣支部幹事長の挨拶あり、司令長官は謹んで御旨を拜受し、各艦へ傳達すべき旨答へらる、（佐世保一行よりの特報）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

愛國婦人會記事

稟告

東伏見宮妃　勳一等周子殿下
賀陽宮妃　勳二等好子殿下
久邇宮妃　勳二等俔子殿下
梨本宮妃　勳二等伊都子殿下

本會名譽會員に戴き奉る事となれり、此段會員諸君に披露す。

明治三十七年二月

愛國婦人會

◎慰問使を第二師團に差遣さる　總裁閑院宮妃殿下の御旨により、慰問使を仙臺なる第二師團に差遣さるゝ事となり、評議員子爵夫人岡部玳子、男爵夫人松平須磨子の二氏は、昨九日午前八時上野出發、仙臺に向ッて急行せられたり。

◎慰問使を第十二師團に差遣さる　總裁閑院宮妃殿下は佐世保に向ひたる慰問使の一行を更に小倉市なる第十二師團に慰問使として差遣さる。

◎慰問使の一行　佐世保に向ひたる慰問使の一行は、去にし六日午前六時佐世保着、長崎縣支部幹事長荒川菊子、同幹事松本せい子、佐世保鎭守府副官海軍少佐吉田辰男、第二艦隊副官舟越少佐、井に奥村刀自、中村事務員等、停車場に出迎ひ、鎭守府に案内せられ、それより舟越少佐の案内にて三笠艦に向ひ、聯合艦隊司令長官東郷中將、同艦長中尾海軍大佐、參謀長等列席の上、御慰問の御旨を述べ、且又會長代理として長崎縣支部幹事長の挨拶あり、司令長官は謹んで御旨を拜受し、各艦へ傳達すべき旨答へらる、（佐世保一行よりの特報）

◎總裁殿下の御慰問使　總裁閑院宮妃殿下は、佐世保軍港に集中の帝國海軍各艦隊乘組員一同へ、御慰問の爲、本會評議員子爵夫人松平久子、同評議員濱尾作子の兩人を佐世保に差遣され、兩人は去にし四日午後新橋發の急行列車にて、同地に向ッて出發し本紙主幹山澤俊夫隨行したり。

◎會長の慰問使　長崎縣支部幹事長荒川菊子、同地在住幹事松本せい子を會長代理として、佐世保軍港に集中の各艦隊乘込員一同に對し慰問の辭を傳へしめられたり。

◎東京府幹事會　總裁殿下の御諭旨に基き、此際一層本會の擴張を計らんが爲め、去にし四日幹事會を開き、岩倉會長以下の檄文に左の書面を添へ、市内各戸に配付し幹事方自ら赴き、勸誘の手段をとらるゝ事となりたり。

愛國婦人會に御入會を勸む

○本會の目的　軍人遺族及癈兵を救護し婦人をして奉公慈善の本分を完からしむ（詳細は規則書にあり）
○本會の總裁は　閑院の宮妃殿下を奉戴し其他皇族妃殿下を各名譽會員に奉戴せり
○會長は公爵夫人岩倉久子氏なり會計監督は男爵澁澤榮一氏及陸軍少將佐藤正氏にして會計の報告は毎年三月各新聞を以て詳細報告す
○東京支部長は男爵夫人千家俊子氏なり其他各府縣は知事夫人支部長なり
○本會は麴町區飯田町壹丁目字牛ヶ淵にあり但東京支部は當分の内本會内に置く
○會費は入會後十ヶ年間特別會員は年額金貳圓通常會員は年額金壹圓なれとも之を一時に皆納せらるゝ時は特別會員は金拾五圓通常會員は金七圓なり然る時は終身會員として會員章の外紅紐を贈らる
○男女一般の寄附金は多少に拘はらず其元金を永久本會の基本金として保存す（特に支途指定の寄附金は此限にあらず）
○入會者には會員章及協約狀を贈り其資格及會員たるの特權を保有せしめらる
○前文の外男女を論せす贊助員なるものあり金五拾錢以上を納入せらるれば贊助員の章を贈らる
○入會の手續　入會希望の方は下名の內若くは本會內東京支部へ葉書又は電話にて申込まるれは直に入會の手續取計へし希くは江湖の淑女方此際奮て入會あらんことを

愛國婦人會何區幹事
何町何丁目　某、、、、、、子
何町何丁目　某、、、、、、子

寫眞面の姓名

松平すゞ子
宇都木ひろ子　磯部つや子　棚橋絢子　三輪田眞佐子
原口關子　笠井梅野子　田村彰子　仁杉歌子
大住りつ子　松村こと子　關郁子　岩佐德子
弘田こう子　濱尾作子　丸木駒子　戸田時子
阿部たか子　堀内えん子　神山万佐子　松平八百子
室田せい子　柳谷千代子　津村錠子　伊東美津子
佐藤春子　豐島文子　相馬陸子　谷くま子
四里子　星つれ子　高木鐵子　毛利安子
松平すま子　松浦島子　鳩山春子　岩倉久子
今野きぬ子　佐方鎭子　有島幸子　鍋島榮子
松浦島子　澁谷ちわ子　大澤つる子　岡部抵子
藤井とく子　佐藤猶子　松平芳子　清浦錬子
伊集院繁子　丸山ます子　内山訓子　中山幸子
服部文子　羽田三緒子　坂井春子　山地鎌子

◎評議員の特別寄附　評議員中山幸子氏は左の書面を添へ、金三百圓寄附せられたり。

寄附申出

對外の關係は益切迫を告げ危機一髮の形勢と相成候に付ては私事も愛國婦人會評議員の末席を汚しあるに依り窃に軍人遺族救護の方法を講じ居り候折柄畏くも總裁殿下より厚き御諭旨を賜り誠に感激の至りに奉存候刻下の事局に對しては縦し女子たりとも奉公の義を勵み擧國一致の實を擧げざるべからざるの秋なるを以て些か微衷を表する爲、左記の金員本會へ寄附仕度幸に御嘉納成し被下候は丶本懷の至りに奉存候此段申出候也

明治三十七年二月一日　愛國婦人會評議員中山幸子

愛國婦人會長公爵夫人岩倉久子殿

一、金參百圓也

◎奥村刀自遊說日誌

十二月十日　午前九時より廣島私立高等女學校に於て講話し、午後は春和園にて山口評議員德久幹事長等の催しにかゝる晩餐會に臨席したり。

十二月十一日　午前十一時德久幹事長の發企にて、副幹事長、幹事事務員等同市竹茂樓上に於て、晝飯會を催され、饗應を受け、午後は猫屋町明教寺に於て開會し、即時入會者四十名ありたり。

十二月十二日　午後一時廣島偕行社にて、一同寫眞を撮り、午後三時より縣立高等女學校に於て師範學校女生徒をも合せて講話す。午後八時半東伏見宮殿下御着につき、廿日市驛まで奉迎し、同所より供奉して、廣島驛に着し、會員一同に休憩所にて拜謁を賜はりたり。

十二月十三日　午前八時廣島出發、宇品港より豐浦丸に乘船し、愛媛縣支部に向ふ。登原福島縣屬三浦新平の二氏は、廣島支部を代表して、高松市迄見送らる。午後一時愛媛縣高濱港へ着、本部幹事長山中評議員以下十數名出迎らる。同地より伊豫鐵道に乘り、松山市に着す、知事官舍に投宿せり。同夜知事官邸にて、鄭重なる晩餐の饗應を受く。

十二月十四日　午前九時より縣立高等女學校に於て開會、傍聽者は各學校職員及生徒約六百名あり、知事も簡單に贊成演說あり。本部幹事長以下職員一同出席盡力せらる、午後一時より勝山城に登り、歸途二十二聯隊衛戍病院を見舞ふ。午後六時より更に同地公會堂に於て開會、傍聽者千五百餘名あり、即時入會者一百名、本部知事始め山中旅團長以下出席せらる。

十二月十五日　午後零時松山發、伊豫郡郡中町へ出張す。午後一時より同地彩濱館に於て開會、傍聽者約四百名、橋本郡長開會の主旨を陳られ、本部知事會員募集上の演說を試らる、五時半松山市に歸る。同夜八時より本派本願寺說教所勸善社に於て開會す、傍聽者約八百名即時入會卅一名ありたり。

十二月十六日　午前八時より師範學校長の希望に依り、同校に於て演說す、傍聽者は男子四百名、女子百名、十時閉會す。山中旅團長は兵士に尙武心を鼓舞せしめんがため、一場の講話せられたき旨懇々刀自を訪問請求せられたるにつき、師範學校の歸途勸善社に於て、將校四十餘名下士卒六百餘名來會の席にて講話す、滿場の兵士感激落淚し午前十一時拍手の內に閉會せり。十二時半知事官邸出發三津濱に向ふ。午後二時より高等小學校に於て開會、傍聽者約八百名即時入會四十名、同地久保田旅館に投宿す。

十二月十七日　本日常地より南豫宇和島地方に向ふ筈の處、海上不穩のため渡航する能はず、依て道後溫泉に至り入湯す。同地町長の希望により即時四五十人の婦人を集め、鮒屋旅館に於て一席の講話を爲す、午後八時半三津濱に歸り塩田旅店に投す。

十二月十八日　本日も强風止まず、折柄雪さへ交りて宇和島に渡航する能はず、且つ年末にも迫るが故に、俄かに巡回日割變更を各郡へ打電し、南豫地方の出張を中止し、一先つ松山市に歸り、東豫地方に隨行する事に決す。本部知事は年末多忙にもかゝはらず、郡部に出張する事を約せられ、一行五人腕車を連れ周桑郡丹原町に向ふ、午後四時半周桑郡役所に於て開會す、傍聽者約一百余名。

十二月十九日　周桑郡各町村長集會の席に於て演說す一百餘名來聽者あり、本部知事も會員募集の演說せらる。

十二月廿日　午前九時一行丹原を發し、新居郡西條町に向ふ、午後二時同地妙祥寺に於て開會、一行會場に臨むの時煙花を打揚げ、傍聽者約七百名、本部知事演說せらる。

十二月廿一日　本日陸行九里、腕車にて宇摩郡三島町に向ふ、午後四時着　千島旅館に投す。但馬郡長等五里手前より出迎へらる。

十二月廿二日　午後二時より興願寺に於て開會、傍聽者約五百名、本部知事も演說せらる、午後六時より有志者の歡迎會に臨めり。

◎新潟縣支部の景況　一月廿三日新發田偕行社に於て開會せり。今其次第を記さんに、一會員着席、二茶菓饗應、三會長岡崎榮子開會を告ぐ四御眞影開扉一同最敬禮、五君か代奏樂最敬禮、六御眞影閉扉七評議員の挨拶、八來賓の祝詞、九配膳、十顧問及職員の講話、十一餘興福引、十二會長閉會を告げ隨意退散。以上の順序にして今回は赤十字社篤志看護婦人會と合同開會せり

當日は岡崎少將特に臨場せられ時局に對する我帝國臣民の決心と云ふ演題により婦人の大に奮發せさるべからさるの道理を說き隨て此兩會の業務の必要が目前に迫り來れる狀勢を縷述し此兩會の擴張は今日の最も急務なる事を切論し兩會員に對し各其事項を別ち最も懇切に奬勵せらる會員一般大に感動し中には淚に咽びたる婦人をも見受けたり午食後愛國婦人會顧問山本少佐篤志看護婦人會講師島村軍醫正同會幹事小野伊曾子等の人々は此兩會の擴張實行に付是又頗る有益なる演說あり當日は數日前より降雪强く積雪三尺に餘り殊に夜來小止なき風雪は肌を劈はかりの寒氣なりしにも拘らず定時前より會員續々參集し出席會員の惣計は七十餘名にして盛會なりし尤も前記の天候なりし爲め新發田町外の會員は稀にして昨年の會に比し大に人員の減したるは甚だ遺憾なりしも中には二三里を距たる町村より雪風を冒し草鞋かけに來會せる婦人の有りたるは何れも感激せし處なり

◎遺族の狀況　本會は各支部に向つて、遺族の現況を深く取調中なるが、今其一二を本紙に揭載する事となせり。

福島縣信夫郡平田村大字山田字芋淵元後備步兵第五大隊第五中隊付陸軍步兵一等卒奈良輪鐵丈寡婦
奈良輪とめ
元治元年十一月五日生

右者、同村平民奈良輪久太郎の五女にして、明治二十一年四月九日を以て鐵丈に嫁し、二人の間に長女きく（廿四年五月廿四日生）長男庄兵エ（廿五年一月五日生）の兩子を擧げ、夫婦相和し、共に農に勵精なりしが、明治廿七年日淸の役起り、夫鐵丈は軍籍に在るの身なるを以て、直に召集に應じ、後備步兵第五大隊に屬して軍に從ひ、翌廿八年十二月廿九日臺灣の項双溪に於て服務中、土匪の襲ふ所となり、名譽の戰死を遂げたり。之の訃報郷里に傳達せらるゝも「とめ」女は驚ける色なく、從容として後事を圖し、亦一層心を勵まし弱腕以て當時七歲及三歲の兒と、尙夫の出征中出生せし乳兒（廿八年二月七日生一女てつ）とを養育し、且つ專ら敎育の不怠んことに意を注き、夫が戰死の爲めに下賜されたる一時賜金を以て之に充て一身を碎き夏期は稚兒を携て日雇稼ぎをなし、冬期は賃機を織り子女を鞠育して、能く家政を整理し、世間普通の義務を欠くことなく、最も隣伍に厚ふし、殊に生計を節して家產の資を貯ふ、然れども長女の如きは生計不加意の爲め就學せしむる能はざりしと雖も、長男は現に高等小學に通學せしめ置くが如き、且つ又た夫の戰死後今日に至る迄、能く貞節を守り、尙終世寡にして節を全うせんと誓ひ居れり。實に斯の婦の如き、世にまれなりと郷人賞せさるなし。婦人の龜鑑と云ふべきなり。

◎特志なる會員　石川縣能美郡中海村原區山崎吉松と云へるは、常に石切を職業とする細民なるが、其長女いとは、本年十六歲にて、克く親に事へ每日親吉松の切出す石材を脊負出し、或は他人の貨物を脊負運ぶを常業とする貧しきものなるが、志は至て高尙にて、或る夜同區尋常小學校にて、能美郡長沼崎氏、愛國婦人會の講話を爲せしを傍聽し、大に其主旨に感したるも、自身の貧賤なるを耻ぢ、即時申込を躊躇し、窃に同學校の校長に縋り日々の勞銀の內を蓄積し、會費を納め國家の爲めに女子の一分を盡し度何卒世間の人に知れざる樣入會の手續をと賴入けれは、校長も大に其志に感じ、此程通常會員に申込の斡旋を爲せり。

同縣同郡同村經海區杉本千代（二十六年）は、至て貧民にて、僅に機織を業とし、兄助次郎は不具者にて今日の生活にも差閊ゆる程のものなるが、同區學校にて愛國婦人會を講話ありし時富樫眞喜と云へる幹事の話に感奮し、一日一尺つゝ機を織延し、其賃銀を以て會費を納むければ餘りありとて、此程役場員に申出助役清水義誼の紹介にて通常會員の申込を爲せり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

世論一斑

◉貴婦人の艦隊訪問　日露の關係切迫して今にも砲煙彈雨の間に相見んとするの形勢に立到りてより此に數十日、戰備悉く成りて今は只一令の下るを待つ海陸の將士の御國のために棄つる生命は惜からねど敵國の卑怯か廟堂の因循か愈よ發途とばかりになりて斯く長々と面白くもなき日を送らせらるゝは戰場に臨んで必死の戰するよりも辛しとは我が軍人の上下おしなべて苦惱する處にして殊に大なりとは云へ一の軍艦内を天地として朝夕天と水との間に淋び居る海軍々人は今日の場合最も辛勞多きとなればいざ鬪戰となりては慰問も容易ならず此際こそ宜しく堪辱の勞苦を慰め更に一層の奮勵を望むこと至當なるべければと豫て軍國の事に盡瘁せる愛國婦人會に於ては濱岡佐世保に碇繫する我が艦隊を慰問するため子爵夫人松平久子、濱尾夫人作子の二夫人をして佐世保に赴き親しく艦隊の將士を慰問せしむる事に決定し既に總裁閑院宮妃殿下の御允可を得て兩夫人は昨日午後六時新橋發にて佐世保に向ひたりと聞く、數日の後此兩貴婦人の慰問に接したる艦隊將士が滿足愉悅果して如何ぞや　（二月五日中央新聞）

◉愛國婦人會の檄文　戰時に於ける軍人の一擧一動は直ちに國家の榮枯盛衰に影響すべきを以て彼等をして安じて戰鬪に從事せしむる事、即ち後顧の憂なからしむるの必要あるは言ふ迄もなき所にして、之がためには國家としても國民としても取るべき幾多の處置方法あるべしと雖も此際一般の婦人の心すべきは身軍人の家族たるものは女々しき哀別離苦の情のために出征者をして後髮を引かるゝが如き感なからしむるのみか却て之を勵まし、身軍人の家族たらざるものは郷黨相團結して適宜の方法を以て出征者の家族を慰むべき事ならんと信ず、此事さへ遺憾なく實行せらるれば、今日に於る婦人の責務や既に全しと謂ふべし。愛國婦人會の檄文は大體に於て我黨の意を得たるものにして、同會が死傷者の遺族及廢兵を救護せんと欲するの精神は我黨の双手を擧げて贊成する所なれども、假令金錢は少くとも言語動作を以て出征者一同の家族を慰安するに努め、出征者をして後顧の憂を斷たしむるこそ必要ならん、　（一月廿七日讀賣新聞社說）

◉下婢問題　下婢の虐待は獨り肉體的のみでなく精神的である。我儘なる細君は下婢の過失を見て怒ろにこれを教誡することをせずに、數日間下婢に向つて詞を發せぬこともある。此の如き場合に際しては下婢の心を苦しむること決して少々でない。又或細君は頻に下女の無學にして無作法なることを惡口すれども、よく考へ見れば、教育あり、行儀正しき婦人が安き給金を貰ふて下女奉行をなす筈がないぢやないか。吾人は如何に考へても下女の方よりも雇主の方に多くの無理があると信ぜざるを得ない無學なる勞働者も何時かは團結して無法なる資本家に當るが如く下婢の虐待も終には反動を起すに至るや決して疑ふべきでない。（安部磯雄氏所論一月廿七日二六新報）云々夫れより歐米の例を示して下婢待遇の途を改むへしと警告せり

◉婦人會の役員に望む　私が會員側の希望を申して見まする と、役員方がモウ一層眞面目にお勉めなされて、會員相互の間に立つて厚誼を結び　上も下も隔意なく、お話もすればお笑ひもするやうに、導き而して全會員の思想の一致を計るのが大へんに必要なことで有らうと思ひます。少し惡まれ口を利くやうですが、何の會でも、役員の貴婦人方が餘り尊大に構へられ、或は控目に過られて、會員に對する言行が、如何にも冷淡な結果として、人をして一種言ふべからざる厭な感じを抱かしむるのが、到る處の通弊であるやうです。同じ努力を費さるゝものならば、慈母の觀念、恩師の資格を以て會員を見るのには位階も貴賤もなく、平等に接して御覽なさい、會員の會に對する情は、必ず深くなつて參ります。例へば寒暑の挨拶、害なき世間話など、それからそれへと話の緒を結び付け此處に入り來る會員をして恰も學校に於ける同窓の如き思ひをさせるやうになると、月々の例會に出席する人も必ず增加して行くに違ひありませぬ。内には會員が互に和ぎ親しんで、自然と思想や觀念を養ひ、外には着々と公益事業に活動し、會其物が世の中より重要視され、動かすべからざる勢力を備へ得てこそ、始めて婦人會の設立された趣旨にも適ひ、目的をも達し得たと云ふことが出來やうかと思ひます　（時事新報婦人の鑑第十一）

◉書齋の樂み　（一）讀書の樂みは、實に人生の一大快事であります、俗人の窺知る所でない、他の樂しみは皆一時的であるが、讀書の樂みは、七十、八十の年齡に達しても尙專らにする事を得（二）大事業も書籍の内より始まるものが多い、廣く世間に示し後世に傳うるものは書籍に限る（三）書齋を作る事は、上流社會に於て特に必要である、書齋は清淨の場所とせざる可からず（四）書齋には自己の理想に近き人の肖像を懸け、書籍以外の趣味を添ゆる事を要す（五）書齋は書籍のみを專らにする場所にあらず、自から研究した所を著述す爲にも必要なり、故に自分の目的に叶ふ書籍を陳列するを要す。次に讀書の方法を陳べんに（イ）通讀すべきものと抜讀すべきものとの區別を知れ（ロ）一の書物を見終らざれば他の書物に移るなとの金言あり、又一時に二三の書物を併讀すべしと云ふ學者あり、倦怠を避くる爲に平易なものを交ゆるも可なり（ハ）自己の讀すべき書籍は可成自己にて購入す可し（ニ）一度閱讀したる書籍は必ず書齋の内に保存し置く可し（ほ）多く讀む事のみ讀書の法と思う可からず（に）音讀す可からず（ほ）著書に比評を加ふる考にて讀す可し（へ）著者の主義綱領を執る可し（と）朝早く起きて讀む可し、冬期は夜間も趣味あり（ち）他の思想の交ちるを避け專心なる可し（り）新著を貴ぶの結果古書を侮る可からずぬ書齋に於ける態度を輕んず可からず人格養成も又讀書室に於て行う可し。　（文學博士井上哲次郎氏所論東京日々新聞）

雜報

◉宣戰の詔勅　宣戰の詔勅は近日の内にいよいよ發布せらるべしと云ふ。

◉時局開展　去にし六日仙臺、小倉、近衛の各師團に向つて○○令出でたる趣きにて、各地ともに兵營は非常に繁忙を極め居ると云ふ。

◉佐世保の艦隊　○○師團の運送兵を護衛して去にし七日某地へ向け出發したりと云ふ。

◉露國公使　開戰と決定せしにつき露國公使は當地を引揚げたる旨官報に見えたり。

◉意外の好下物　露國軍艦マンジュール號は昨冬來長崎船渠に入りて修繕中なるが迚も數日間には竣成の見込なき由工事中若し宣戰の布告ありたらんには當然日本の領有となすを妨げず或は意外の好下物を得ん乎同艦は千八百八十九年の進水にして排水量一千二百二十四噸にして速力十三浬を有する海防艦なり。

◉國債應募　軍資獻納は義勇奉公の精神に出づるものなれば誠に嘉すべき事なるも政府は已に國庫債券募集の事を決定し一億圓の債券を發行せるにつき國民は軍資獻納よりも募債に應ずる樣との主旨にて内務省より地方官に向つて勸誘方の内訓を爲したりとなり。

●海戰の勝利　旅順にて海戰大勝利の報有たり。

日露海軍勢力比較表

日本 艦種	艦名	排水噸數	露國 艦種	艦名	排水噸數
戰艦	朝日	一五四四三	戰艦	ペレスウイット	一二六七四
同	初瀬	一五二四〇	同	ポビエダ	一二六四七
同	三笠	一五三六二	同	オスラビヤ	一二六七四
同	敷島	一五〇八八	同	ペトロパウロスク	一〇九六〇
同	八島	一二五一七	同	ポルタワ	一〇九六〇
同	富士	一二六四九	同	セバストポール	一〇九六〇
裝甲巡洋	出雲	九九〇六	同	レトウキザン	一二七〇〇
同	磐手	九九〇六	同	セザレウキツチ	一二九一二
同	淺間	九八五五	裝甲巡洋	グロンボイ	一二三五九
同	常磐	九八五五	同	ロシヤ	一二一九五
同	吾妻	九四五六	同	リユーリク	一〇九三六
同	八雲	九八〇〇	同	バヤーン	七七二六
同	日進	七七〇〇	巡洋	パルラダ	六七三一
同	春日	七七〇〇	同	ワリヤーグ	六五〇〇
巡洋	笠置	四九七八	同	オーロラ	六七三一
同	千歳	四八三六	同	ボカツイル	六六七五
同	高砂	四一三七	同	ヂイヤナ	六七三一
同	吉野	四二二五	同	アスコルド	五九〇五
同	須磨	二七〇七	同	ノヴツク	三〇八〇
同	高千穗	三七〇九	同	ボヤーリン	三二〇〇
			同	アルマーツ	三二八五

◉日進春日兩艦歡迎會　回航員歡迎會專務委員會は協議の末大略左の諸項を決定したり

一　歡迎會　場は日比谷公園とし歡迎大園遊會を開催する事

一　當日尾崎市長は會員を代表して歡迎辭を朗讀する事

一　回航員には士官以下下士以下を區別し貴金屬製美術的徽章を贈與する事

一　當日の餘興として相撲、打毬、花火等の催しを爲すべき事

◉討露軍歌　（福島陸軍少將作歌）

世界に名高き日本國　旭に輝く日の御旗
皇統連綿大君の　臣子は今や五千萬
仁義を以て建てし國　忠勇勝りし國の民
之に反する敵國の　其有樣は皆知らん
詐僞りを常として　他國の領地を掠め取り
咎なき家を焼拂ひ　罪なき人を擊殺し
逃る婦女子を辱しめ　乳に泣く小供を刺殺し
兇惡暴戾神人の　共に赦さぬスラヴ人
國は廣きも荒野原　人は多きも烏合勢
一億半餘の人口も　六十有餘の異人種ぞ
直隸平野の戰ひに　進み兼たる卑怯者
歷史に名を得し哥薩克も　今は昔の夢なるぞ
旭に解くる雪氷　消えてぞ失せし露西亞兵
イザ起て當へ我男兒　駒さへ勇む春立てり
仁義の師に敵はなし　愉快極まる此の戰
旅順、哈爾賓蹈破り、　烏拉の山の絶頂に
旭の御旗を飜へし、　スラヴを露都莫斯科の
森の叫りに追籠めて、　我大君の御威德を
普く宇内に宣揚し、　世界の平和を樂まん

◉親子三人の獻金　豐前小倉市實町に住居し長女とみ（十九）を相手に女髮結を業とする松岡かつ（四十九）は十年以前より第一の財貨として珍重せる純金の指輪二箇と節儉して蓄へたる金五圓を添へ長女とみは金一圓五十錢長男鷹司（八）は毎日五厘宛貰ひ溜めたる貯金の一圓を今回の軍事費の内にとて小倉市役所に獻納願出でたる處指輪の如き物件は受付ける限りにあらずとて一應却下せられたるも指輪や根掛簪の如きは精神込めて女子の大切とするものなれどお國の爲と思へばこそ手放して獻納するものなれば志の程をと強て再願獻納の手續を了りたり殊に鷹司は毎日菓子買ふ代にと與へたるを都度地獄箱に納めて貯蓄し居たるを今回母と姉とが獻金すと聞きて自分も是非にと迫り扨は親子三人打揃ひて獻金を願出たるなりと云ふ

◉帝國教育會の通俗講談部　同部設立の旨趣を聞くに左の如しと云ふ、

近年社會改良の聲は大分諸方に聞える樣に成りました然し是も聲ばかりで其實行を敢てしないては何の役にも立たぬではありませんか。茲に無學の耳學問と聞えた芝居若くは寄席と云ふものゝ社會教育に少からぬ影響を及ぼすは何人も之を認むる處でありますが然し現今の寄席の如きは動もすると風敎に害をこそなせ之を裨益するなどの事は思ひもよらぬ處であります、且現今の寄席は餘りに鄙俗に餘りに疎雜なるが爲に苟も多少の識見ある中流以上の男女には潔く足を入れ難い感があるので此等の人々に對しても然るべき娛樂場を供給すべき必要は已に迫つて居ると思ふのです。本會が此度通俗講談の會合を起したのは、全く此等の缺點を補ふ爲なので一面寄席改良の資に供すると同時に進んでは社會改良の一方便ともしたいと云ふ是が旨趣の大要であります

◉婦人にして一万圓の獻金　神戸市の清水せい子氏は自己の財產中より一万圓獻金方申出でたり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大日本女學會編纂

婦人寶典

此書は小松宮頼子殿下の總べさせられ女學の通信教授を以て世に名高き大日本女學會に於て多年蒐集されし所の女學に關する和漢洋の諸材料中より最も婦人に適切なる部分を拔萃したるものと新たに名家の起稿されたるものとを一書にまとめ以て婦人座右の良師友たらしめんが爲に編輯されしものにて殊に其學藝諸科目は孰れも專門大家の擔任に係り實に世に類なき婦人寶典なり其目次並に講述者左の如し

和紙摺帙入全五册（紙數壹千三百頁）實價金參圓參拾錢
洋紙摺（クロース製）合本壹册（紙數同上）實價金貳圓貳拾錢
小包郵送料內地　和裝貳拾錢　洋裝貳拾錢

◎右の書籍發行につき本會事務所に於て購讀者の便宜を計り左の特別割引を以て愛國婦人讀者本會々員會友並に「をんな」讀者達へ送本方取扱ひ候
和裝　割引代價金貳圓九拾錢　洋裝　同金壹圓九拾五錢
但し小包郵便料前掲の割り貳拾錢を要し候尤も東京市內は郵送料を要せず候

東京市麴町區下二番町三十七
大日本女學會事務所（電話番町一三三〇）

御進物用

美麗調製

東京市日本橋區堺町通町ふきや町
中西儀兵衛
電話浪花七百番

ツキビジン毛はへ油

は毛根の營養を充分ならしめ毛髮の發生を盛にす又髮を黑く艶はしくならしめ、やけど、はげ、其他毛の生すへき處に發毛せさる時此油を用ゆれば直に發毛す
煉油も同樣の効能あり
瓶入香油廿五錢　煉油壺物入十五錢

東京神田久右衞門町電話浪花一一五二番
金城堂　大野金五郎

半ゑり帶揚類　品正確類多數　價低廉は特色

○ショール○頭巾○下締○帶止○帛紗○絞り襟飾○雀形○ゑり治形○紀念形まげ入　おろし小賣

本店　ゑり治　新橋竹川町十二番地　電話新二〇二七
支店　ゑり治　神田表神保町壹番地　電話本局九五二

特製大袋金五錢景品トシテ廿袋ニ對シ輕銀煙管一本進呈

めざまし齒磨

東京神田　電話浪花一一五二　大野金城堂

本店　東京日本橋區長谷川町貳番地
卸部　美濃磯本店
電話浪花二八五九
電略ミイリ

小賣部
本郷區本郷五丁目五　電話下谷一四一五　美濃磯　本郷支店
淺草區諏訪町廿貳　美濃磯　淺草支店
芝區新櫻田町九番地　（美）小田商店
牛込區神樂坂町二丁目八　（內）伊澤商店
四谷區傳馬町二丁目　（內）伊澤支店

麝香獸印
ムスク香水
本石町四　芳香藥種問屋　松澤商店

ヴワイトレツト製
壽美花おしろい
伊壹香室吉製

定價　大瓶二十錢　小瓶十二錢
定價　大瓶廿五錢　中瓶十五錢　小瓶十錢

西洋色白くなる洗劑
壽美花あらひ粉
東京兩國　伊勢吉香室

定價紙箱紅彩紙函ひ錫詰六錢五厘ボツクス入二錢袋入壹錢

婦人ふるちの藥

定價一貼五錢三貼十四錢五貼廿三錢七貼三十二錢
一此藥劑は婦人血の道一切の藥にして淸血を補ひ古血をめぐらすとかんようにして少しも脾胃にさわるよなく血を下すにてはなく血をみちびき通ずる藥なり第一月々めぐり少き婦人はたッぷりと見るなり數年古血滯りある婦人は其のふるちのかたまり殘らずつうずるなり●○南まけづつう目まひによし○ふるちとゝこほり○ながち○しらち○手あしへびれ○血しやく○ひゑるときさしこみいたむに功あり○むねこしいたみ○つきむしによし○さんごあとはらのいたみはいかほどつよきいたみにても一ト包にて功あり○さんごわるちのとどこほりに用ひて功あり○猶能書にくわしくしるす

東京市本所區東兩國横網町一丁目
本家製藥所（舍）
卸賣店　伊勢吉本店（電話浪花二一七五八）

千葉內科院

瘰癧　◎◎◎最新療法◎◎◎
○切開を要せず○して根治す
○心臟病○脚氣　專門
神田區三崎町三の一
四通り二十五

小兒婦人科專門
西川醫院
本所區綠町一丁目卅一番地　南わり下水際
電話浪花三千七十三番

●水原産科婦人病院
○所在神田區猿樂町十二番地（電話本局千七百〇九番）○外來診察午前中○入院往診隨時○同院に私立産婆學校の設あり

耳鼻咽喉科院
院長　ドクトル　山上兼輔
診療每日午前
四谷區本村町三十七番地
電話番町七三〇（士官學校前）

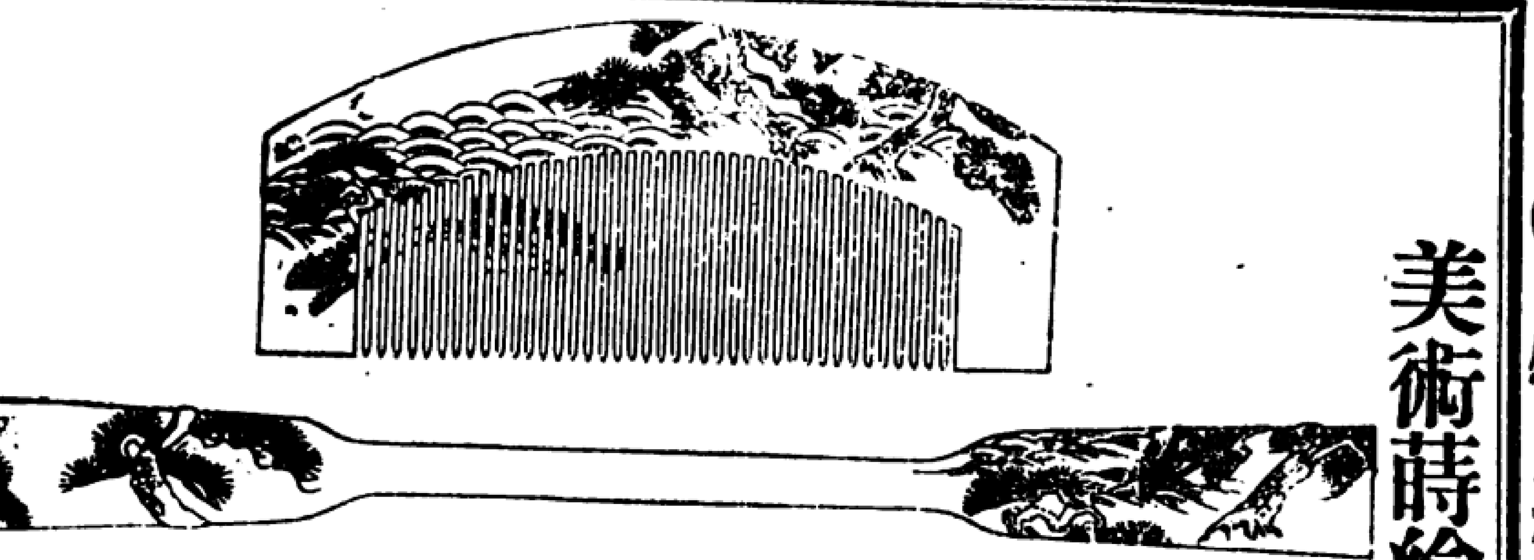
院長　醫學博士　榊順次郎
副院長　醫學士　久保德太郎
婦人科産科榊病院
東京麴町區三番町卅三（電話番町三九五）

明治三十七年二月十日發行(毎月十日廿五日二回)

◎特約販賣店

◎東京堂 神田區表神保町三番地

◎東海堂 京橋區銀座四丁目



美術蒔繪櫛笄

柳の髪のうるはしきに映めを添ろ月ならで四季を通まぬ櫛笄は花紅葉いろ/\と咲へと今般新調致せしは黒鼈甲又は四方張を以て流行の中京形に造り之に諸大家の意匠を凝せし名花山水其他の模様を蒔繪せしもの又は奇貝寳玉類を彫刻嵌入せし佳麗の品なれば世の貴婦人方は流行に後れ給はぬうち御注文あらんことを

黒鼈甲臺一組價
十圓十三圓十五圓
廿圓以上五十圓迄

四方張臺一組價
三圓五圓六圓八圓
十圓以上十三圓迄

東京市京橋區尾張町
白牡丹本店
松田幸治郎
電話新橋百十一番

從四位淺田宗伯先生直傳 **淺田飴**

良藥にして口に甘し

だんせきに淺田飴
空腹にめし

定價 金五拾錢 金參拾錢 金貳拾錢 金拾錢

本家 東京神田鍛冶町 大阪北久寳寺町 **堀内伊太郎**

日本全國到る處の藥店に販賣す

春風の如き家庭を望む人は本書を讀むべし

最新刊 慶應義塾教授菅緑陰先生閲 渡部竹蔭君著

明治の家庭

(総ふりかな付)洋裝美本價廿五錢郵稅四錢

本書は我國現今の不完全、不規則極まれる、家庭を矯正せんが爲めに生まれたので、已に家庭を作られた紳士や、奥さんは勿論、苟も將來理想の家庭を作らふと云ふ、靑年淑女は、是非一讀せざる可らざる所の珍書であります、且本書の如き家庭書は、進歩したる新春の贈答品として最も趣味のあるものと考へます

久米見献村君著 大好評増訂六版

家庭の教育 子供のしつけ

洋裝酒艶麗全一冊定價廿五錢郵稅四錢 本書は著者が該博の識と、多年の實驗に依り家庭教育の仕方を、十三章百六十餘條に説き示されたる者なれば、婦女子にても容易に理解せられ、直に實際に試むることを得べきやう記述せられたる近來稀に見るの好著なり

發兌元 東京日本橋區箔屋町 前川文榮閣

東京日本橋區南茅場町二番地
株式會社 **扶桑銀行**
電話浪花八十四番・百十六番

松本支店 長野縣東筑摩郡松本町
飯田支店 仝縣下伊那郡飯田町
諏訪支店 仝縣諏訪郡上諏訪町

資本金貳百萬圓

帝國貯蓄銀行

東京銀座一丁目河岸通り (電話新橋 八一六・二八〇八)

定期預金 三ヶ月以上 年六分
當座預金 日歩壹錢壹厘
特別當座預金 日歩壹錢四厘

本郷一丁目 本郷支店
飯倉三丁目 飯倉支店
赤坂表一丁目 赤坂支店
四谷大通り 四谷支店
南品川一丁目 品川支店
横濱吉田町 横濱支店

牛込神樂坂 神樂坂支店
神田須田町 須田町支店
兩國米澤町 米澤町支店
淺草雷門前 吾妻橋支店
代理店 日本橋坂本町 田中銀行

●一錢以上何程にても御預り最も便利に取扱申候
●毎月五日迄の御預け金は全月分の利子を付け申候

女生徒募集

東京市牛込區白銀町十九番地

高等女子實修學校

規則入用ノ向ハ郵券二錢ヲ送ラルベシ

新製指環及手鉅

(1) 價廿一圓八拾錢……廿二金三匁付片切彫
(2) 價廿七圓八拾錢……同……高彫
(3) 價二拾圓八拾錢……同……片切彫
(4) 價五拾六圓五拾錢……同四匁付……高彫
(5) 價廿二圓九拾錢……十八金三匁付高彫

時計寳玉貴金屬美術品及銃砲火藥商
東京市京橋區尾張町貳丁目拾六、七、八、九、番地
天賞堂
電話新橋(特三三三・三一五三)

天賞堂出張所々在地
●東京市神田小川町●横濱市●名古屋市●大阪市、廣島市●熊本市●長崎市●小樽市

豫約募集

伯爵 東久世通禧君題辭　子爵 福羽美靜君題辭　文學博士 小中村清矩君遺序　東宮侍講 本居豐穎君校閲　文學博士 末松謙澄君叙　増田于信君譯

譯文源氏物語 新編紫史

豫約申込期限 三月廿日

製本既成 見本送附 御望あれば郵稅御進呈す

紙數三千七百餘頁 ◉和裝全十冊箱入頗美◉四六判洋紙刷 ◉挿繪五十餘入 定價金六圓

豫約價 一時拂 金四圓 (着金順に送本す) 三回拂 金四圓五十錢 申込の月より毎月一圓五十錢三回 (最終送本) 市外郵稅五十錢

本書は千古の名文源氏物語を解釋せる者なり文古雅に失せず卑俗に陷らず典雅艶麗人をして原文を讀むの感あらしめ平易明快人をして巻を掩ふを忘れしむ其解釋の方法は省略せる語を補ひ解し難き詞を改め地の文と詞の文とを示し言語動作の彼我を明別し極めて平易に極めて明快に然も成るべく原文の體裁を保ち成るべく原文の辭句を用ゐたり故に一面は**通俗源氏物語**にして一面は源氏物語の**講義**なり抑源氏物語は我邦小説の巨擘千古の名文然も行文古雅にして解し難し國文學を研究する者本書を通讀すれば原文は一二卷を讀むにして足れり源氏の講義は曾て之有らざりしなり湖月抄は傍註書のみ不明を免れず斯學に志す者源氏物語を解讀せむとせば本書を原文と對照し先づ本書を觀て而て後に原文を讀むの外亦方法無かるべし本書一部分は嘗に刊行せる者今回全部完成し豫約者には特に箱入を以て調進す國文和歌の研究國語科受驗等に必要なるは勿論應接室書齋等の裝飾として紳淑女の體面上亦缺くべからざる者なり大方諸氏希はくは豫約の好期を失せらるゝ勿れ

發行并豫約申込所 東京市神田鍛冶町 **誠之堂書店** (電話本局九四九)

豫約申込所 神田表神保町 東京堂　同 中西屋　日本橋通二丁目 六合館　大阪心齋橋北久太郎町 柳原書店　京都寺町二條 若林書店　取次各地書店

婦人最良藥

子宮病血の道 産前、産後の諸症に種々の藥を用ゐて其効なく久しく病床に苦しむ人は本劑を試みよ

◉如何なる難病も二三週間に全治す

中将湯

●詳しき効能は大廣告の時御注目ありたし

定價 一日七錢五厘、三日廿錢、一週四十五錢 二週八十五錢、三廻り一圓二十五錢

●本舗へ御注文の方は病人の容体御申込あれ

本舗 東京日本橋通四丁目 津村順天堂　大阪堺筋鹽町北入 津村順天堂

中将湯は全國各藥店にあり

發行兼印刷人 山澤俊夫　編輯人 手島益雄　發行所 大日本女學會内

印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地株式會社秀英舍第一工場

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

明治三十七年二月十日發行（每月十日廿五日二囘）
明治三十五年三月廿七日第三種郵便物認可

帝國圖書館 IMPERIAL LIBRARY

愛國婦人第四十七號附錄

愛國婦人會本部新年評議員總會寫眞
（氏名本紙參照）

發行兼印刷人　山澤俊夫　編輯人　手島益雄　發行所　大日本女學會內愛國婦人發行所
印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

總裁　小松宮賴子殿下

副總裁　鍋嶋侯爵夫人

推戴賛成員　有栖川宮大妃董子殿下
東伏見宮妃周子殿下
華頂宮妃經子殿下
梨本宮妃伊都子殿下

其他賛成員貴婦人一百餘名

大日本女學會

新學期を開き何人にても入會を許す

◎本會は女子教育の普及發達を圖らむ爲に女子必須の諸學科を揭けたる女學の講義錄を發行し種々の障碍の爲に女學校に入學すると能はざる女子に居ながら修養を積ましめ以て一般女子の地位を高めん事を目的とす

◎本會發行の女學講義は畏くも　皇后宮の御覽を辱うし殊に御歌下賜の光榮を擔ふ

◎本會は第一流の名家をすぐりて講義を囑託し其講義有益にして趣味に富めるは既に世の定評ある所にして明治二十八年創立以來已に貳萬五千人の講習修了者を出せり

◎女子素養の程度に應ぜん爲講義錄を高等と簡易との二種に別つ月謝は高等科金四拾錢簡易科金貳拾錢とし入會の節束脩(高等科四拾錢簡易科貳拾錢)を要す

◎女學講義初劵前期は十一月五日に後期は同廿五日に發行せり詳細なる會則希望者は端書にて請求あり次第送呈すべし

東京市麹町區下二番町卅七番地

大日本女學會

(電話番町千三百三十番)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN